

氏名	江原 雅江	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6002 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	Returning to the Open Cage —The Lower East Side Ghetto as Anzia Yezierska's Place (開いた鳥かごへの回帰—アンジア・イージアスカの場所としての ローワー・イーストサイド移民街)	
学位論文審査委員	教授 中谷 ひとみ	教授 劔持 淑
	教授 上田 和弘	教授 杉澤 伶維子
	准教授 寺西 雅子	

学位論文内容の要旨

撞着的なタイトルが印象的な「開いた鳥かご」は、1970年に亡くなったアンジア・イージアスカの死後出版の短編である。収容人数を超えたアパートは騒音や匂いで、老いた語り手にとって居場所というよりも牢獄として描かれる。そこに突然迷い込んだ小鳥は、近所に住む女性のかごに一度は入るものの、人から餌を受け付けず、結局かごから放たれることとなる。小さな珍客の訪れを喜ぶ語り手は別れを惜しむものの、空に戻る鳥を眺めてすがすがしい気持ちになるが、再びごみごみとしたアパートという現実に戻っていく。このアパートの描写は聴覚・嗅覚といった感覚に訴えるものであり、かつてイージアスカが暮らし繰り返し題材としたローワー・イーストサイドのユダヤ系移民たちがひしめくゲットー・移民街を髣髴させるものである。本論は地理学者・イーファー・トウアンの「空間」と「場所」の理論を援用し、自伝的要素の強い小説を創作したイージアスカの生涯と作品群(長編小説すべてと重要な短編小説)を分析している。空間は鳥にとっての空のように、開かれており自由であるが危険に満ちている一方で、場所にはとどまることができ、経験を経ることにより居場所として親しみを有するものであるとトウアンは位置づけている。この理論を使って小説世界を理解しようとしている。

ロシア領ポーランド出身の他の移民作家と異なる点は、イージアスカがロシアを卑下すべき空間

として捉えている点であるが、劣悪な三等船室を通過点としてたどり着いたローワー・イーストサイドは貧困・搾取・男性の支配・母親たちの自己犠牲といった否定的要素で溢れ、汚く、悪臭がし、騒々しい。アメリカでの貧民街は、飛び立つべきかごのように描かれる。その中で小説のヒロインや語り手たちは一作家自身と同様に一自立したアメリカ人になろうと模索する。かごを開けるカギとして、教育や同胞のモデルと援助、そして語り手たちの野心や上昇志向が指摘できる。しかし実際に移民街を後にしても、慈善施設やテーブルマナーで屈辱的な思いをさせられたり、ジョン・デューイを髣髴させる知識階級のワスプ (White Anglo-Saxon Protestant) の、移民を研究対象としてしかみなさない態度に遭遇することになる。自伝的要素の濃い最後の長編『白馬の赤リボン』においては、作家として活躍しながらも、それでもなおユダヤ系アメリカ人としてのあり方を模索せずにはいられない姿を描いている。

長編で語り手やヒロインたちの移民街への回帰と自己実現を果たすことが繰り返し描かれる点では、イージアスカが「ゲットー・パストラル」文学の先駆として捉えることもできる。また、ユニークな登場人物などの存在、おとぎ話/ロマンス的要素などの特徴も挙げるができるが、それ以上に彼女の文学世界の重要な特徴・テーマは<かご>に戻るという人物たちの決断である。かつて未熟であった頃は閉じているかのように見えたかごは実は開いているのであり、開いたかごを出入りすることがターニング・ポイントとなり、トウアンのいう「休止」の場所が形成される。語り手やヒロインたちが移民街に実際に戻る一方で、イージアスカは早くから移民街を離れることにより外からそこを眺めている。トウアンの理論に照らせば、彼女は自身のユニークな経験により、移民街というアンビヴァレントな場所を空間から切り取り、提示しているといえる。

論文の構成としては、Introduction で作者の伝記、批評史、「空間」と「場所」という概念とトウアンの理論を導入した後、第1章ではかごとしての空間を、第2章ではかごからの脱出を、第3章ではゲットーの外からの視点の転換を、そして第4章ではかごへの回帰を、長編小説と代表的な短編に言及しながら、それぞれ論じ、結論部分で、かごに戻ることを明確にした。

学位論文審査結果の要旨

本研究は、地理学者のイーファー・トウアンの「空間・場所」論を援用しながら、初期のユダヤ系アメリカ人女性作家の小説世界を分析したものである。先行研究がそれほど多くない分野である点で、またアメリカ文学の中ではそれほど注目されていない彼女の小説を詳細に論じて、その美点と意義を明らかにしたいという点で、非常に意欲的であり、日本でのアメリカ文学研究にも貢献すると思われる。

江原さんは岡山大学大学院文学研究科で文学修士号 (イギリス文学) を取得 (1994) 後、大学で教鞭をとりながら、この新しい分野で研究を続けている。北海道での非常勤講師を経て、1997年倉敷芸術科学大学専任講師となり、2005年より准教授である。日本ユダヤ系作家研究会や岡山英文学会で口頭発表 (最近の主要なものとしては 2017, 2016, 2012, 2011 年) し、論文もコンスタントに

発表している。前者が発行する『シュレミール』や『イマキュラータ』、後者が発行する学術雑誌、そして『中四国英文学研究』掲載の論文が代表的な論文である。また、日本ユダヤ系作家研究会が発表した4冊の研究書にも共著者として参加し、共訳もある。十分な業績であると思われる。

7月に行われた予備審査では(1)アメリカ文学の中では比較的知られていない作家および時代であるので、イージアスカの文学作品全体の概要、研究史、そして他のユダヤ系作家との比較にも言及して、彼女の文学世界の特徴をまとめる章を立てる必要がある。(2)これまでに日本ユダヤ系作家研究会やそれが公刊している学術雑誌や共著の中で主要な小説作品についての論を発表してきたが、共著の一部として書かれた論文が多いので、それぞれの共著のテーマ例えばユダヤのユーモアや、聖と俗など一の観点から論じられたものが多い。博士論文として、ゲッターと自由や書くことなどにかかわる、自分のオリジナルなテーマで議論を再構築し、論文のタイトルも再考する必要がある。(3)ゲッターから脱出して同化したアメリカ人となることに心を奪われていた作者/主人公/語り手が、アメリカ文化とユダヤ文化の両者を経験した後、最終的にユダヤ的なものに回帰したことを **open cage** というメタファーに焦点を当てて、小説作品を時系列的に論じる方法は納得のいくものではあるが、位置付けが分かりにくい章もあり、このことも構成の再考が必要な理由となっている。(4)**Conclusion** が不十分である。(5)目次や引証文献などに不十分な点があり一主として、参考文献が少ないことと新しい資料が使われていないこと一また書き方や英語の間違ひもみられる、などの指摘があった。

(1)の指摘に対しては、**Introduction** でイージアスカの小説世界全体の概要、研究の動向と現状、他のユダヤ系作家との比較も付加したうえで論を始めるという変更を行った。

(2)と(3)に対しては、小説を時系列的に論じるのではなく、テーマに沿った構成に組み替えた。

(4)に関しては、各章末にも **conclusion** を置いてより読みやすくし、最終的な結論部分もより丁寧に書いている。

(5)に関しても、タイトルと目次を再考し、参考にした資料も増やした。

予備論文では論の展開がそれぞれの作品のストーリー展開に依存するため、論文全体を淡白なものにしている感がぬぐえないとの意見もあったが、イーファ・トウアンの「空間」と「場所」の理論を援用して論を展開したこと、また上記(1)～(5)の指摘に対する改善が十分に行われたことにより、論文に厳密さと深まりと広さが出てきたことは評価に値する。英文の間違ひはほとんどない。

しかしながら、以下のような指摘もあった。イーファ・トウアンの「空間」と「場所」の理論を援用して論を展開する意義はあるにしても、アメリカへの移民にとって場所と階級は密接な関係があるが、階級の問題に関してはトウアンの理論のみでは不十分ではないか。イージアスカと当時の初期ユダヤ系作家との比較は行っているが、当時のアメリカン・ルネッサンスのころの白人作家たちとの比較、そして読者層の反応にも言及すれば、論文により深みが出るのではないか。**gender** と **ethnicity** という点からも論じているが、**gender** の概念が曖昧である。構成を大きく変えたが、同じことの繰り返しが見られるなど、流れの悪さが出てしまった部分もある。

以上のような難点はあるものの、江原さんが意図するように、作品や登場人物の魅力やイージアスカの文学性を十分論じており、扱う作品も必要なものを網羅している。そのうえ、原稿やインタ

ビューの資料を探しにアメリカのボストン大学に行くなど精力的に取り組んだことは十分評価できる。これらの新しい資料を使ってのさらなる研究も今後の課題として考えている。今回の書き直しで欠点は大部分見られなくなった。今後の研究の進展も期待でき、審査員全員一致で本論文を博士の学位に値するものと判断した。